

平成 21 年 6 月 8 日現在

研究種目：基盤研究 (C)
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19520502
 研究課題名 (和文) ニーズアナリシスに基づく英語カリキュラム開発 (2) 「書き言葉」
 (読解・作文)
 研究課題名 (英文) Developing New Curriculum for English Language Teaching Based on
 the Needs Analysis (2) Written English - Reading and Writing
 研究代表者
 田中 美子 (TANAKA YOSHIKO)
 国際医療福祉大学・保健医療学部・教授
 研究者番号：10049041

研究成果の概要：ニーズアナリシスを基に、将来コメディカル専門家となる学生に対して、書き言葉 (Written English) をターゲットとした英語カリキュラム開発を研究目標とした。必要な読解教材を収集・編集し、また、直接書き下ろして教科書を作成した。文献の内容により取り入れる読み方技術 (skills) の指導、Corpus 研究、語彙力を高めるための方法 (モバイル利用) などについても研究を行った。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	計
2007 年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2008 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
年度			
年度			
総 計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語教育・ニーズアナリシス・ESP・カリキュラム・コーパス

1. 研究開始当初の背景

「コメディカル大学における英語教育のニーズアナリシスに基づくカリキュラム開発」[基盤研究 (C)・課題番号 17520393]において、学生に身につけて欲しい英語力と、職業人として研鑽して欲しい英語力を含め、英語教育についてのニーズ分析を幅広く行った。(2005～2006 年度)

その結果、ESP(English for Specific Purposes)を基盤として、さらに一歩踏み込

む EOP(English for Occupational Purposes)一卒業後の医療現場における全般的コミュニケーション能力育成の一の必要性に到達した。そこで、大学教育において、EOP と学問研究にも応用できる英語力、および、異文化理解という「教養」の要素を含めたカリキュラム開発を心がけた。

この最初の研究で、“Spoken English”に焦点をあて、聴解・発話を目的とするカリキュラム開発と教科書作成を完成させた。

さらに研究を発展させるためには、英語の

4 技能（読む、書く、聴く、話す）の中で未開発の“Written English”に焦点を当てた研究の必要性が求められた。

2. 研究の目的

先のニーズアナリシス分析に基づき、“Written English”「書き言葉」(読解・作文)に焦点を当てたカリキュラム開発と、関連分野の文献の読解力育成を目的としたテキスト作成が目的である。

(1)まず、教材内容の興味・関心をつかむために、新1年生と、大学教育を1年間経験した新2年生を対象に、英語の教材、その他についてのアンケート調査を行った。この調査を踏まえ、医療福祉分野で求められる文献を、これまでの教育経験を生かして絞り込んでいくことが求められた。

(2)療法や福祉関連の概念は欧米でその学問の基礎が確立され、英語文化の中で展開・発展してきたという背景がある。そのため、専門書や文献の理解を深める上で、英語の持つ歴史・社会・文化を含めて言葉を理解することが重要となる。したがって、医療福祉分野で必然的な Corpus 研究も目的とする。

(3)必要な語彙力をつけるために、関連する単語の意味の習得、Context（文脈、前後関係）から意味を推測する演習も必要である。また、最新のモバイルを利用した語彙力アップをみる対照研究も試みることにする。

(4)読み方、読む技術（Skills）の習得も重要である。Skimming, Scanning, Predicting, Identifying Main and Supporting Ideas, Previewing, Identifying Meaning from Context 等の実践演習も目的とする。

3. 研究の方法

“Written English”に焦点を当てたカリキュラム開発と読解力育成を目的とする文献収集、および読み方技術の育成を下記の手順で進めた。

(1)新入生（n=937）を対象に、高校3年間の英語教育についてのアンケート調査を行った。

- ① 高校での授業時間数
- ② 3年間の英語科目の内容（講読、文法、作文、会話、Listening, 総合英語等）
- ③ 受験用問題集の位置づけ
- ④ 文法の説明
- ⑤ 大学英語授業で最も学びたいもの
- ⑥ 英語が重要な理由
- ⑦ 読みたいトピック

(2) 新2年生（n=760）に、1年間の英語授業、教科書の内容についてのアンケート調査を行った。

- ① 興味を持ったユニット
- ② 将来役に立つと思ったユニット
- ③ 面白くないと思ったユニット
- ④ （教科書以外で）読みたかったトピック
- ⑤ 読み方について
- ⑥ 取り組みたかったこと

(1) (2) の調査に基づき、分析を行った。

(3)学科教員の協力を得て、各分野の代表的な学術雑誌1年分の中から研究論文を選び、その中で使用されている語彙を収集、統計分析を試み、必須の語彙を集めた Corpus 作成に着手した。

また、代表的な語彙に関して、その語源の解説から、内在する意味を明らかにした。

(4)読む力をつけるための最上の方法は、できる限り沢山の英語文章を読むことである。その過程で、関連語彙の習得、Context からの意味の推測などができるようになる。しかしこの過程を計量化することは非常に難しいので、最新のモバイル e-learning を学習ツールとして利用した場合の語彙力アップを把握するための対照研究を試みた。

①400名の1年生を協力者とし、そのうち200名を実験群とし、残りの200名を統制群とした。実験群の学生には、夏季休暇の3ヶ月間（7・8・9月）、毎日携帯電話に配信される英単語のエクササイズに取り組むことを課した。統制群にはこの学習コンテンツは配信されない。

②いずれの協力者も実験開始前に語彙テスト（望月テスト）を実施し、10月第1週には実験終了後の post-test を行った。実験群・統制群とも、英語力が類似したものとなるように、共同研究教員3名の担当するクラスから選定した。

③pre-test と post-test での両群の結果の推移・変化によって、モバイル e-learning の学習効果を検証した。その際、学習頻度や使用状況（間違えた問題へ再度の試みやアクセスする時間帯など）もアンケート調査した。

(5)読み方技術の習得も重要であり、どの Reading skills を用いるかを考えながら文章を読む習慣をつけさせることが大切である。Skimming, Scanning, Predicting, Identifying Main and Supporting Ideas, Previewing, Identifying Meaning from Context などの読み方技術を、文章で実際に体験し、理解させ、全ての英文を同じ読み方で読むことは、能率が上がらないことを体験させた。

4. 研究成果

(1) 新入生へのアンケートからは次のような示唆が得られた。

- ① 高校で英語学習が重視されていた。
- ② 高校では文法重視の授業であった。
- ③ 大学では「英会話」を学びたいと考えている。
- ④ 各専門分野というよりは、「医療英語」全般に興味をもっている。
- ⑤ 楽しい英文も読みたいと考えている。
- ⑥ 「グローバルな時代」という認識が強く、英語が必要と考えている学生が多い。

(2) 新2年生へのアンケートからは次のような示唆が得られた。

- ① 保健医療学部の学生は医療関係の内容に興味を持った。しかし、看護の学生と福祉などの文系の学生は、身近な環境問題、人間的な問題に興味を示した。
- ② 看護を含む保健医療学部の学生は、医療関係が非常に役に立つと実感していた。文系の学生は、環境問題を一番役立つとした。
- ③ 保健医療学部の学生は、概して医学・保健・福祉に関するものを読みたいと考えたが、文学・文化にも興味を持っている。
- ④ 長文を精読することを希望している。
- ⑤ TOEIC への人気は高い。
- ⑥ 文法を学びたいと考える学生が多い。

新入生、新2年生へのアンケートから、話題として学習意欲を喚起させるには、医学医療福祉にかたよらず、ヴァリエティーにとんだ教材を提供する必要があるということが分かった。

- ① 学生は「医学・医療」関連の英文を読むことに対して「興味があり」「必要で」「将来役に立つ」と考えている。
- ② 学生は、「楽しい」と思えるような英文も読んでみたいとかがえている。
- ③ 専門分野の学習を始めて間もないにもかかわらず、自分の専門分野に近い話題に対しては強い興味を示す。
- ④ 1年間の学習を終えると、医療全般のみならず、自分たちの専門分野に直結した教材も読みたいと考えるようになる。

(3) Corpus 作成には、予想以上の時間が必要で、研究は現在も続行中である。語源の理解・解説は言葉の理解に必須であり、作成した Reading のテキストを用いて、学生に認識を促す努力を行っている。学生が English-English Dictionary を使用して、言葉の厳密な定義を理解する努力を始めたことは嬉しいことである。

(4) モバイルを利用した語彙力アップの対照研究での「学習効果」の分析とアンケート調査の結果は、次のようになった。

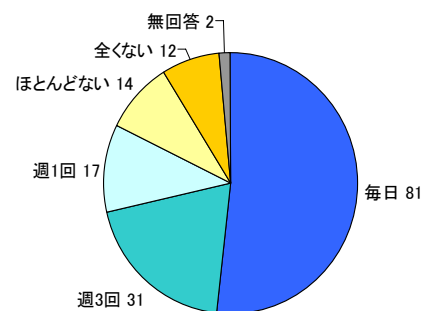
① モバイル e-learning での英語学習の効果

グループ	モバイル e-learning		Pre-test	Post-test
統制群 N 159	なし	平均	3211	3410
		最小	2500	1833
		最大	4333	4967
実験群 N 157	あり (3ヶ月間)	平均	3289	3420
		最小	1567	1533
		最大	4833	5133

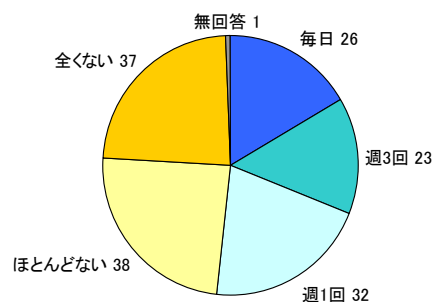
2つのグループの伸びを比較したが、実験群、統制群ともに有意差があり、アクセス頻度と語彙テストの伸びの相関は認められない。

② アンケート調査の結果

モバイル e-learning での学習頻度・7月



モバイル e-learning での学習頻度・9月



夏季休暇中ということで、全くの自学自習という環境であったため、取り組み始めた7月は半数以上の学生が毎日アクセスしていたが、9月になると毎日学習していたのは4分の1になってしまっていた。語彙力アップも実験群だけに有意差があったわけではない。しかし、学生にとって日常不可欠な携帯電話というツールは、学習の場でも有効であること、また、授業で与えられた課題という given motivation がないにも拘わらず、学習を継続できたということも分かった。このことから、モバイル e-learning を学習ツールとして活用するには、課題があることが判明した。

モバイル e-learning は英語学習の補助ツールとして有効であるため、教師の適切な管理と教材コンテンツの独自開発が必須となるであろう。そのことを踏まえれば、ひとりひとりに合ったペースと自由な時間帯・場所で語彙学習が可能になるモバイルは、これからの学習手段としては発展の余地があるという結論にいたった。

(5) 英文を見て、どの読み方 Skill を使って内容理解をするかを考えて読み始めるようになることで、徐々に読む技術が高まると考えられる。教師の適時のアドバイスが必要である。

(6) 前科研費で編集した LL 用の教科書は所属大学学生用のものであったが、今回さらに手を加え、保健医療福祉系の大学全般で使用できるテキストとして作成した。

(7) 講読用のテキストとして、本学に学ぶ学生をターゲットにした、「建学の精神」や「WHO 憲章」の抜粋など、引用や書き下ろした reading material を作成した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[発表論文] (計 1 件)

(1) BUDGELL, Brian; MIYAZAKI, Michiko;
O'BRIEN, Myles; PERKINS, Robert;
TANAKA, Yoshiko

“Developing a Corpus of the Nursing Literature” *Japan Journal of Nursing Science*. vol. 4(1). p. 21-25. 2007. 6

[学会発表] (計 6 件)

(1) 南井紀子・斉藤智恵・千葉礼子
2008. 11. 15 IAICS (International Association for Intercultural Communication Studies) Conference (Kentucky, USA, University of Louisville)

“Mobile E-Learning- Can it be an Effective Tool for English Learners?”

(2) 南井紀子・斉藤智恵・千葉礼子
2008. 10. 18 外国語教育メディア学会
関東支部第 121 回研究発表会・総会
(於：神奈川県横浜市、関東学院大学関内
メディアセンター)
「モバイル e-learning の可能性と今後の課題」

(3) 田中美子・南井紀子・宮崎路子・千葉礼子
2008. 7. 13 第 11 回日本医学英語教育学会
(於：東京都港区、笹川記念会館)
「専門分野で生きたツールとなる英語読解力育成」

(4) Budgell B, Miyazaki M, O'Brien M,
Perkins R, Tanaka Y.
2007. 4. 20 International Medical
Education Conference
(Kuala Lumpur, Malaysia, International
Medical University)
“Our Shared Biomedical Language”

(5) Perkins R, Budgell B, Miyazaki M,
O'Brien M, Tanaka Y.
2007. 4. 20 International Medical
Education Conference
(Kuala Lumpur, Malaysia, International
Medical University)
“Assessing Biomedical English
Competency: A Fair Valid, Sensitive
and Reliable Approach”

(6) Tanaka Y, Miyazaki M, Budgell B,
O'Brien M, Perkins R.
2007. 4. 20 International Medical
Education Conference
(Kuala Lumpur, Malaysia, International
Medical University)
“Developing A Corpus of the Nursing
Literature - A Pilot Study”

[図書] (計 2 件)

(1) 田中美子・南井紀子・宮崎路子・千葉礼子
Core Spirit of IUHW
2009.3 国際医療福祉大学 (講読副読本)

(2) 田中美子・南井紀子・宮崎路子・千葉礼子
Clinical Scenes for a New Age
2009.1 マクミラン・ランゲージハウス出版

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 美子 (TANAKA YOSHIKO)
国際医療福祉大学・保健医療学部・教授
研究者番号：10049041

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

南井 紀子 (MINAMII NORIKO)
国際医療福祉大学・保健医療学部・教授
研究者番号：30296206
宮崎 路子 (MIYAZAKI MICHIKO)
国際医療福祉大学・保健医療学部・准教授
研究者番号：60306230
千葉 礼子 (CHIBA REIKO)
国際医療福祉大学・保健医療学部・講師
研究者番号：20296205